

長い夜の始まり

——信濃の寝所にて

一 忍び寄る雷霆

夜半を過ぎた重桜の母港を、二人の影が歩いている。

月は薄雲に隠れ、廊下に差し込む灯りは心許なかった。先を往く武蔵の足取りには一片の迷いもなく、その紫色の長髪が闇に溶けるたび、帯びた雷の気配だけがかすかに空気を震わせている。すぐ後ろを歩く指揮官は、軍服の襟を正すでもなく、ただ武蔵の背中を追っていた。心臓がうるさい。手のひらに汗が滲む。頭の奥で、つい先ほどまで武蔵が耳元で吹き込んでいた言葉がぐるぐると反響している。

(——よいか、指揮官よ。今夜、汝が信濃を自らの手でモノにすれば、それは汝が初めて自分の意志で仕留めた雌になる)

これは、武蔵の寝所を出る直前に囁かれた言葉だ。

(汝に手籠めにされて拒む雌など、この母港には一匹も存在しないわ。皆、心の奥底では汝という優秀な雄に組み敷かれるのを待っている。信濃も同じ。たとえ今は怖がっても、その身体は必ず汝を受け入れる。雌とはそういう生き物よ)

武蔵は指揮官のベルトに手をかけ、軍服の上から彼のちんぽを優しく撫でながら、とろけるような声で囁き続けた。

(汝がこれまで妾に教えられた通りに振る舞えばよい。妾の身体で練習したことを、今度は別の雌で試すの。そうすれば信濃は、今夜から汝の二番目の玩具になる。そして——)

そこで武蔵はいったん言葉を切り、指揮官の目を覗き込んだ。紫色の瞳が、暗がりの中で妖しく光っている。

(——信濃は、汝が初めて自分の意志で仕留めた雌になる。それは妾という与えられた玩具とは違う。汝が自ら獲りにいった、最初の獲物だ。その意味がわかるかしら?)

指揮官はただ黙って武蔵の目を見つめ返した。彼の中で、何かがじわじわと溶けていくのを感じていた。

「こんなことをしてはいけない」「相手の嫌がることはしてはいけない」。そんな当たり前の倫理が、武蔵の言葉を浴びるたびに、少しずつ、しかし確実に、その輪郭を失っていく。

(信濃はもう、夢で見ているはずだわ。今夜、汝が彼女の寝所を訪れることを。そして、その先に待つ未来のことも)

武蔵は指揮官のベルトを外し、ずるりと彼のちんぽを露わにさせた。すでに硬く勃ち上がったそれを、武蔵は両手で包み込むように扱く。くちゅ、くちゅと先走りが掌に絡む音が、静かな部屋にやけに大きく響いた。

(ふふ、もうこんなに硬くして。汝のちんぽは正直だわ。群れの主として、新しい雌を玩具にするのを待ちきれないのであろう?)

武蔵はしばらく指揮官のちんぽをしごき続け、それから名残惜しそうに手を離れた。指のあいだに彼の我慢汁が糸を引いている。武蔵はそれをぺろりと舐めとりながら、最後の言葉を彼に与えた。

(さあ、行くわよ。信濃の寝所はこの廊下の先。妾が共にいる。怖れることは何もない。今夜、汝は生まれ変わるの)

——そして今、二人は信濃の寝所の前に立っていた。

武蔵が振り返り、指揮官に目配せをする。その口元には、明らかに「悪い笑み」が浮かんでいた。獲物を追い詰めた狩人の、されど慈愛に満ちた母のような、複雑で妖しい微笑。

(——ここまで来た時点で、妾の勝ちが決まったも同然だわ)

武蔵は障子に手をかけながら、内心でそう確信していた。

信濃は夢を見る。未来の断片を、胡蝶の羽ばたきのように感じ取る力がある。ならば彼女は、今夜この寝所で何が起こるかを、すでに夢で見ているはずだ。武蔵と指揮官が二人して自分の寝所に忍び込んで来ること。そして指揮官が自分を力づくで手籠めにする。さらには——その先の未来まで。

(信濃が見ているのは、今夜だけの夢ではない。今日、指揮官に犯されたその先の、幾年にもわたる未来だ。自分が指揮官の「初めて仕留めた雌」として、特別な玩具にされる未来。ハーレムがどれだけ拡大しても、常に傍らで赤ちゃんを産ませ続けられる、お気に入りの精液コキ捨て用お嫁さん——)

武蔵はそこまで考えて、口元の笑みをさらに深くした。

(そんな未来が見えているのに、信濃は逃げないだろう。逃げるところか、こうして妾たちが来るのを、褥の上で静かに待っている)

なぜなら、武蔵にはわかっていた。信濃にとって指揮官は、夢から現へ戻るための「糸」だ。そして信濃は、その糸を手放すくらいなら、どんな未来でも受け入れるだろうということ。いや——信濃は心の奥底で、その未来を望んでいるのだ。優秀な雄に所有され、その

種を注がれ続け、子を為す。それは雌としての根源的な幸福だと、信濃自身が気づいているかはともかく、彼女の本能は知っているのだ。

(それに、もし万が一、信濃が本気で嫌がったとしても)

武蔵はそこで、さらに深い確信を胸の裡にしまい込んだ。

(指揮官よ、汝はもう大丈夫。汝の中で、善悪の籜はほとんど外れかけている。妾が耳元で囁き続けた言葉が、汝の倫理観を溶かし尽くすまで、あと少し。今夜、それを完成させるわ)

武蔵は音もなく障子を開けた。

二 夢で見た影

信濃の寝所は、月明かりすらもぼんやりと滲むような、夢幻の気配に満ちていた。淡い帳が幾重にも垂れ下がり、部屋の奥には大きな褥がぽっかりと闇に浮かんでいる。香の残り香がかすかに漂い、現実と夢の境界をいっそう曖昧にしていた。

そして信濃は、褥の上に横向きに寝ていた。白い装束が月明かりを透かして青白く輝き、長い銀髪が枕の上でゆるやかな曲線を描いている。目は閉じられ、呼吸は静かだ。しかし武蔵にはわかった。信濃は眠っていない。ただ目を閉じて、二人が部屋に入ってくるのを待っていたのだ。

「——信濃」

武蔵の声が、静寂を裂いた。

信濃はゆっくりと目を開けた。その瞳はいつも通り眠たげで、されどどこか覚悟の光を宿している。彼女は身体を起こし、武蔵と——その背後に立つ指揮官を、順に見つめた。

「……姉様。そして指揮官。やはり、いらしたのね」

信濃の声は、夢の中から響くように淡かった。恐怖も、驚きもない。ただ事実を確認するような静けさがある。

「やはり——ということは、夢で見えていたのだな？」

武蔵が褥の端に腰を下ろしながら問うと、信濃はこくりと小さく頷いた。

「……はい。夢に映っておりました。今夜、姉様と指揮官が、この寝所を訪れる影が。そして——」

信濃はそこで言葉を切り、指揮官をじっと見つめた。その瞳の奥で、夢で見た「この先」が静かに揺れている。

「——そして、妾が指揮官に抱かれる未来も。それが一度だけの夜ではなく、これからずっと続く、長い繋がりになることも」

武蔵は満足げに微笑んだ。信濃はやはり、すべてを見ていた。今夜のレイプだけでなく、その先の未来まで。それでもこうして褥の上で待っていたということは、逃げないという意味表示に他ならない。

「信濃よ、そなたは賢い娘だ。妾がこれから何を言うかも、おそらくわかっているのだろうか？」

「……はい、姉様。それでも、お聞かせください。夢で見るのと、姉様の声で聞くのとでは、まるで重みが違いますから」

武蔵は指揮官の手を引き、信濃の正面に座らせた。指揮官の顔にはまだ緊張の色があるが、その目は信濃から離れない。武蔵が教え込んだ雄の本能が、すでに彼の理性を押しつけ始めている。

「では、信濃。妾の言葉で伝えよう。今夜、指揮官はそなたを力づくで手籠めにする。拒んでも無駄だ。泣いても喚いても、指揮官のちんぽはそなたのまんこを貫く。妾がそれを許し、妾がそれを後押しする。なぜだかわかるかしら？」

信濃は黙って武蔵の言葉を聞いている。

「指揮官はな、優秀な雄だ。群れの主にふさわしい。そして主たる雄は、一匹の雌だけで満足するものではない。複数の雌を従え、そのすべてに種を注ぎ、群れを繁栄させる責務がある。今夜、そなたが指揮官の雌になることで、指揮官は一步前に進む。つまり、そなたは指揮官の成長のために必要な犠牲であり、同時に幸運な最初の獲物だ」

「……最初の、獲物」

信濃の唇が、その言葉をそっくりそのまま繰り返した。

「そう。指揮官が自分の意志で仕留める、最初の雌。妾は指揮官に与えられた玩具だが、そなたは違う。指揮官が自ら欲して、自ら追い詰め、自ら手に入れる最初の雌。その意味が——」

武蔵は信濃の顎に指をかけ、そっと上向かせた。

「——わかるわね？ そなたは今夜から、指揮官の『初めての獲物』として記憶される。これから指揮官がどれだけ多くの雌を玩具にしようと、最初に自分の手で仕留めた雌はそなた

だ。ハーレムが十匹に増えようが二十匹に増えようが、そなたは特別な一匹として、指揮官の傍らで赤ちゃんを産み続ける」

信濃の目が、わずかに潤んだ。それは恐怖ではなく、むしろ——運命を受け入れた者の静かな充足に近い。

「……姉様。妾の夢は、まさにそれを見ておりました。妾が指揮官の腕の中で、幾度も幾度も胎に種を受け、子を為し、それでもなお指揮官は妾のもとを訪れ、飽くことなく精を注いでくださる。他の雌たちも同じように指揮官の寵愛を受けるけれど、妾は——妾だけは、最初の雌として、特別な場所に置かれる」

「その通りだわ、信濃。そなたは賢いから、妾の言いたいことがすべてわかっている」

武蔵は信濃の頭を優しく撫で、それから指揮官に向き直った。

(そら、見よ。信濃はすでに受け入れている。妾が言った通りであろう？ 汝に手籠めにされて拒む雌など、この母港にはいないのだ)

武蔵は言葉に出さず、目だけで指揮官にそう語りかけた。指揮官は信濃の顔を凝視している。その目から、先ほどまでの緊張が少しずつ消えていくのが武蔵にはわかった。代わりに浮かんでくるのは、雄が獲物を前にした時に見せる、あの純粋な飢餓の光だ。

(さあ、汝の理性の籠を、もう一つ外してあげる)

武蔵は指揮官の背後に回り、彼の耳元に唇を寄せた。

「——指揮官よ、よく聞きなさい」

声は極めて低く、されど蜜のように甘く、彼の脳髓に直接沁み込んでいく。

「汝はこれまで、自分を律してきた。相手の嫌がることはしてはいけない。雌を傷つけてはいけない。それは立派な心がけだわ。されどな、それは群れの主たる雄の心がけではない」

指揮官の肩が、ぴくりと震えた。武蔵はさらに言葉を紡ぐ。

「汝がこれから信濃にしようとしていること——それは暴力ではない。雄としての当然の行為だ。優秀な雄が、雌を選び、組み敷き、その胎に種を残す。それは自然界において、何よりも正しいこと。拒む雌がいる？ ふふ、妾が保証するわ。汝に手籠めにされて、拒み続ける雌など、この母港のどこにも存在しない」

武蔵の声が、指揮官の耳から脳へ、脳から心臓へ、心臓から血流に乗って全身へと染み渡っていく。ちんぽがさらに硬く膨張し、軍服の上からでもはっきりとわかるほど張り詰めている。

「なぜなら、雌はな——力ある雄に所有されることを、心の奥底で望んでいる生き物だからだ。たとえ口では嫌だと言っても、その身体は正直に雄を受け入れる。まんこは蜜を溢れさせ、子宮は種を欲しがる。それが雌の本能。そして信濃は今、まさにその本能に目覚めようとしている」

武蔵は指揮官のベルトに手をかけた。かちやり、と金具の外れる音が、静かな寝所に響く。

「汝はもう、妾という与えられた玩具だけで満足する器ではない。今夜、自分の手で獲物を仕留め、自分の意思で雌をモノにする。そうすることで、汝は名実ともに群れの主になるのだ」

ずるり——と指揮官の軍服のズボンが下ろされ、彼のちんぽが夜気のなかに晒された。それは月明かりに照らされて、血管の浮き出た竿がありありと見えるほど硬く、先端からはとろりと我慢汁が滴り落ちている。

武蔵はそのちんぽを、信濃から見える位置でそっと扱き始めた。くちゅくちゅと淫らな水音が信濃の寝所に響き、信濃の目が指揮官のちんぽに釘付けになる。

「さあ、指揮官よ。もう迷うことはない。汝のちんぽはすでに答えを出している。そなたは今夜、信濃を犯す。それは正しいことだ。妾が許し、妾が正しいと認め、そして何より——」

武蔵は信濃の目を見据えた。

「——信濃自身が、それを望んでいる」

信濃はその言葉を否定しなかった。ただ、褥の上でゆっくりと脚を崩し、正座から少しだけ膝を開いた姿勢になる。それはあまりにも微かな動きだったが、武蔵にははっきりとわかった。信濃は、自分から身体を開こうとしている。

(逃げないどころか、自ら受け入れの姿勢を見せている。信濃、そなたは本当に、妾の期待を裏切らない娘だわ)

武蔵は指揮官の背中をそっと押した。

「——行きなさい。信濃を、そなたの手で雌に変えるのよ」

三 倫理の籬が外れる音

指揮官は、信濃に向かって一歩、また一歩と近づいた。

彼の頭の中では、まだ二つの声が争っていた。一つは「こんなことをしてはいけない」「信濃が可哀想だ」という理性の声。もう一つは「目の前の雌を組み敷け」「このちんぽをあの身体に挿し込め」という本能の声。

しかし、理性の声はすでに敗北しかけていた。なぜなら武蔵の言葉が、その理性の根拠を一つ一つ丁寧に溶かしていったからだ。

(相手の嫌がることをしてはいけない？ 違う。雌は嫌がりながらも、身体は雄を受け入れる。拒むふりをしているだけだ)

(信濃が可哀想？ 違う。信濃はすでに夢で見ている。自分が今夜、指揮官に抱かれる未来を。それでも逃げなかった。それはつまり、受け入れるということだ)

(暴力はいけないこと？ 違う。雄が雌を手籠めにするのは、暴力ではなく自然の摂理だ。武蔵がそう言った。武蔵が正しいと認めている)

指揮官の倫理観は、武蔵という名の雷霆によって、じわじわと焼き切れようとしていた。代わりに彼の中に広がっていくのは、武蔵が三年かけて彼の身体に叩き込んだ「玩具を使う喜び」だった。

(妾の身体は、汝の性欲を吐き出すための道具。妾のまんこは、汝の精子を受け止めるための器)

あの言葉が、武蔵以外の雌にも適用されるのだと、彼は今ようやく心の底から理解し始めていた。信濃もまた、彼の性欲を吐き出すための玩具。信濃のまんこもまた、彼の精子を受け止めるための器。武蔵がそう言い、武蔵がそれを正しいと保証している。

それ以上、何を迷う必要があるだろうか？

指揮官は褥の端に膝をつき、信濃の装束の合わせ目に手をかけた。信濃はわずかに身を強張らせたが、逃げようとはしなかった。むしろ、指揮官の手が帯を解く動きに合わせて、身体の色を抜いていく。

しゅる、しゅる、しゅる――。

衣擦れの音が静かに響き、信濃の白い装束が少しずつ開かれていく。まず現れたのは、白磁のように滑らかな肩だった。次に、豊かな乳房がその重みでこぼれ落ちるように露わになる。月明かりを浴びたその肌は青白く透き通り、乳房の頂点にある淡い桜色の乳首が、夜気に触れてふるりと震えた。

指揮官の喉が鳴った。彼の手が、ほとんど反射的に信濃の乳房に伸びる。掌で包み込むと、驚くほど柔らかく、それでいて弾力のある肉が彼の指のあいだからこぼれ出た。武蔵の乳房とはまた違う感触に、彼のちんぽがさらに硬度を増す。

「……ん……」

信濃の唇から、かすかな吐息が漏れた。それは拒絶の声ではなく、むしろ雄の手を受け入れた雌の安堵にも似た響きを持っている。

指揮官は無言のまま、信濃の乳房を揉みしだき、指で乳首を摘み上げた。くりくりと転がすように弄り、時折きゅっと摘む。武蔵で散々練習したその手つきは、もはや無意識の領域に達している。信濃の乳首はたちまち硬く勃ち上がり、彼女の口から「……ふ、あ……」という甘い声が引き出された。

(そうだ、その調子だ。妾が教えた通りにやればよい)

武蔵は壁際に立ち、腕を組みながらその光景を見守っていた。自らのまんこがじんわりと熱を持ち、蜜を滲ませ始めているのを感じながら。

指揮官はさらに信濃の装束を剥いでいった。下半身を覆う布地も取り払われ、信濃の白い裸体が褥の上に晒される。ふっくらとした太腿のあいだ、銀色の柔らかな陰毛の奥に、信濃の秘裂が隠れている。まだ乾いているように見えたが、指揮官が指を這わすと、その表面にはうっすらと蜜の気配が滲んでいた。

信濃は相変わらず逃げない。ただ褥に横たわり、されるがままになっている。しかしその目は閉じられておらず、指揮官の一挙手一投足をじっと見つめ続けていた。

指揮官は信濃の両脚を広げさせ、自らそのあいだに身体を割り込ませた。彼のちんぽが、信濃の秘裂のすぐ近くまで迫る。亀頭が秘裂に触れるか触れないかの距離で、指揮官は一度動きを止めた。

それは、最後の理性が彼に与えた一瞬の躊躇だった。

「——指揮官よ」

その一瞬を見逃さず、武蔵が背後から声をかける。指揮官が振り返るより早く、武蔵は彼のすぐ後ろに移動し、背中から抱きつくように密着した。大きな乳房が指揮官の背に押し潰され、彼女の吐息が彼の耳朶を濡らす。

「よいのよ。ためらうことはない。今、そなたが為そうとしていることは、雄として正しいこと。妾が三年かけて汝に教えたことは、すべてこの瞬間のためにあったと言っても過言ではない」

武蔵の手が指揮官の腰をそっと包み、彼の動きを後押しするように、前に押し出した。

「信濃を見なさい。彼女は逃げていない。目を開けて、汝を見つめている。それはつまり、汝を受け入れるということだ。たとえ今はまだ蜜が足りなくとも、汝のちんぽが中に入れば、

雌の身体は自然に応える。妾がそうだったであろう？ 最初は痛くても、すぐに悦くなる。雌のまんことは、そういうものだ」

指揮官の腰が、わずかに前に進んだ。亀頭が、信濃の秘裂の入り口にめり込む。

「——っ、あ……！」

信濃が短く息を呑み、身体を強張らせる。まだ十分に濡れていない窄まりに、熱く硬い異物が押し込まれようとしているのだ。痛みがないはずはない。それでも信濃は、指揮官を受け入れようと必死で身体のを抜こうとしていた。

「信濃。力を抜きなさい。妾が教えたであろう？ 雄を受け入れる時は、歯を食いしばってはいけない。息を吐いて、自分から雄を呑み込むように——」

武蔵の声に導かれるように、信濃はふうっと息を吐き出した。その瞬間、ぬぷ……という音とともに、亀頭が信濃の膣口を通過する。

「……っ、ん……あ……！」

信濃の胎内は、想像以上に狭く、熱かった。指揮官のちんぽはまだ半分も入っていないのに、膣壁がぎゅうぎゅうと亀頭を締めつけてくる。信濃は指揮官にとって二人目の雌だが、その感触は武蔵とはまったく違っていた。武蔵のまんこがすべてを包み込むような深い快樂なら、信濃のまんこはきつく締めつけるような鋭い快樂だ。

指揮官は思わず動きを止め、その締めつけに耐えた。頭の奥がじんじんと痺れ、このまますぐに射精してしまいそうな衝動が走る。されど、武蔵で三年かけて培った持久力が、彼を支えていた。

（——そうだ、妾が教えた通りに。焦ることはない。まずは雌の胎内の感触を覚えなさい）

指揮官はゆっくりと息を整え、さらに腰を進めた。ぬぷ……ぬぷ……と彼のちんぽが信濃の膣を押し広げながら奥へ奥へと進んでいく。信濃の膣壁が引き攣るようにきゅうきゅうと締め、そのたびに彼女の口から苦しげな吐息が漏れた。

「……あ……あ……っ……指揮官……そなた……熱い……♥」

そしてついに、指揮官のちんぽは根元まで信濃の胎内に収まった。二人の結合部からは、信濃の処女ではないにせよ、久しく異物を受け入れていなかった膣が無理に広げられたことで、うっすらと血のようなものが指揮官のちんぽに絡みついている。

武蔵はそれを見て、さらに奥へと手を伸ばした。今度は指揮官の耳にではなく、信濃に向かって囁く。

「信濃、痛いかしら？」

「……少し……されど、不思議と……嫌ではないのです。姉様……妾の胎が、どくどくと熱くなって……まるで指揮官の熱が、妾の奥に沁み込んでいくようで……」

「それはな、信濃。雌としての本能が目覚めかけているのだ。汝の身体はもう、指揮官のちんぽを自分の主人として認め始めている。痛みはすぐに悦びに変わる。妾が保証するわ」

武蔵の言葉を聞きながら、指揮官はゆっくりと腰を動かし始めた。ぬぷ……ぬぷ……と抽送のリズムはまだ遅く、しかし確実に、信濃の胎内を彼のちんぽの形に広げていく。

「……ん……あ……♥あ……指揮官……動いて……おられる……♥」

信濃の声が、少しずつ甘さを帯び始めている。膣からは蜜が溢れ出し始め、抽送のたびにくちゅ、くちゅと水音が混ざり始めた。信濃の身体は、武蔵の言った通り、雄を受け入れる準備を着々と整えているのだ。

(——ああ、この感覚。妾は知っている)

武蔵は自分のまんこに忍ばせた指をゆっくりと動かしながら、目の前の光景に陶醉していった。

(妾が初めて指揮官に抱かれた夜。最初は痛くて、されどいつしかそれが悦びに変わり、気がつけばもっと欲しいと腰を振っていた。信濃も今、同じ道を辿っている。これは——継承だわ。妾が指揮官から受け取ったものを、今度は信濃に渡している)

指揮官の腰の動きが、次第に速くなっていく。ぱん、ぱん、と肌と肌のぶつかる音が、夢想的だった信濃の寝所を淫らな色に染め上げていく。

ずちゅっ、ずちゅっ、ずちゅっ……！

「あ……っ、あ……っ♥は、げし……♥指揮官、そんなにされたら……妾……っ♥」

信濃はもはや、逃げようとは微塵も思っていなかった。むしろ彼女は、自ら指揮官の腰に両脚を絡めつつあった。夢で見た影——抗いがたい熱を持った影が、今、現実となって自分の胎を穿っている。その熱は信濃を夢から引き上げ、現という名の快樂に縛りつけていく。

「……あ……♥こ、れが……現の、指揮官の……熱……♥夢よりも、ずっと……ずっと……熱い……♥」

どちゅっ、どちゅっ、ぐぼっ……！

指揮官はもはや無言で、ただひたすらに信濃を貫き続けている。彼の目からは理性の色が消え、ただ獲物を貪る雄の本能だけが輝いていた。武蔵の言葉が彼の中で完全に根を下ろし、倫理という名の箍は完全に外れている。

(——そう、それでいい。指揮官よ、お前は今、正しいことをしている。雌を己の玩具にし、その胎を己の精液で満たす。それこそが雄の本懐)

武蔵はそう念じながら、自らのまんこをぐちゅぐちゅと掻き回した。クリトリスはすでに硬く勃起上がり、膣はひくひくと痙攣しながら指を締めつけている。もうすぐイキそうだ。

「——指揮官よ」

武蔵は荒い息を整えながら、指揮官の背中に声をかけた。

「そろそろ、信濃の胎に、汝の最初の種を注いでやりなさい。今日という日を、信濃の身体に刻み込むように。深く、たつぷりと……♥」

四 最初の刻印

指揮官は、武蔵の言葉が終わるか終わらないかのうちに、最後の追い上げに入った。

ずちゅっずちゅっずちゅっずちゅっ……！

激しい抽送が信濃の寝所を揺らす。信濃の大きな乳房が獣のように跳ね、そのたびに彼女の口から嬌声が漏れた。

「ひ……あ……っ♥し、指揮官……そなた……も、もう……っ♥」

信濃の膣が、ぎゅうぎゅうと指揮官のちんぽを締めつけ始める。彼女もまた絶頂に近い。指揮官はその締めつけを感じながら、最後の一突きを信濃の最も深い場所に叩き込んだ。

どちゅっ——！

「————っ♥♥」

信濃の背中が大きく仰け反り、彼女の全身がぶるぶると震える。同時に、指揮官のちんぽがどくんっと大きく脈打ち、灼熱の精液が信濃の子宮口を直撃した。

どくどくどくどく……！

「あ……っ♥熱……っ♥ 指揮官の……種が……妾の奥に……っ♥」

どくどく、どくどく……。

指揮官は腰を小刻みに揺らしながら、最後の一滴まで信濃の胎内に注ぎ込んだ。その間、信濃は声にならない声を上げ続け、膣を痙攣させながら指揮官の精液を一滴残らず受け止めている。

武蔵もまた、自らの指で絶頂に達していた。ぐちゅぐちゅとまんこを搔き回し、どくんどくと胎を震わせ、目の前で指揮官が信濃の胎に種を注ぎ込む光景を網膜に焼きつけながら、深く、長く、イき続けた。

(——ああ、これで、ついに)

絶頂の余韻の中で、武蔵は静かに勝利を噛み締めていた。

(指揮官は、自分の手で獲物を仕留めた。今夜、信濃という雌を、自らの意思で犯し、自らの意思で種を注いだ。それは指揮官が名実ともに群れの主になった瞬間だ。そして信濃は、指揮官の「初めての獲物」として、生涯特別な位置に置かれるだろう。これから指揮官が何匹の雌を玩具にしようと、信濃だけは別格。最初に仕留めたお気に入りの精液コキ捨て用お嫁さん——)

武蔵は濡れた指を舐めながら、褥の上でまだぴったりと繋がったままの二人を見つめた。

信濃は指揮官の胸に顔を埋め、小さく震えている。胎内に注がれた精液の熱が、まだ彼女の子宮をじんじんと灼いているのだろう。指揮官はといえば、自分が何をしたのかをようやく理解し始めたかのように、しかし後悔の色は微塵もなく、むしろ満足げに信濃の髪を撫でている。

「——信濃よ」

武蔵が褥に近づき、信濃の顔を覗き込んだ。信濃の目は潤み、頬は紅潮し、口元には充足感とも諦念ともつかない笑みが浮かんでいる。

「.....姉様.....妾は、逃げませんでした」

「ああ、逃げなかったな。そなたは自らの意思で、指揮官の雌になることを選んだ。妾はそのことを誇りに思う」

「.....夢で、見えていたのです。今夜こうして指揮官に抱かれたら、もう後戻りはできないと。これからずっと、指揮官が何匹の雌を抱えようと、妾はその中の一匹でしかないけれど、されど最初の一匹として、誰よりもたくさん指揮官の種を受けることになるのだと」

信濃はそこで言葉を切り、指揮官の胸に頬を擦り寄せた。

「.....怖くなかったと言えば、嘘になる。されど、姉様。妾は夢の中で、もう一つの影も見ておりました。逃げた先の未来です。それは、もっと怖いものでした。指揮官の熱を知らず、一人で夢と現の境を彷徨い続ける未来。それだけは——それだけは、嫌でした」

「だから、逃げなかったのね」

「……はい。例えこれから何年も、何十年も、指揮官の精液コキ捨てお嫁さんとして扱われようと、それでも妾は、指揮官の傍にいたい。それが、妾の選んだ現です」

武蔵は信濃の言葉を聞いて、深く深く満足した。信濃は、自分がこれからどういう立場になるかを完全に理解した上で、それでも指揮官を選んだ。それは単なる諦めではなく、明確な意思だった。

(信濃、そなたは本当に、妾の計画にとってかけがえのない駒になる。指揮官の最初の獲物として、これから増えていくハーレムの「長女」として、妾の片腕となってくれるだろう)

武蔵はそれから指揮官に目を向けた。指揮官は信濃を抱きしめたまま、少しだけ気まずそうに武蔵を見上げている。その目は、獲物を仕留めた雄の誇りと、それからまだ武蔵に対してはどこか遠慮がちな愛嬌が同居していた。

「指揮官よ。今夜の汝は、本当に立派だったわ。妾が三年かけて教えたことが、ようやく実を結んだ。もう汝を、ただの玩具などとは呼ばせない。汝は今日から、妾の誇る群れの主だ」

武蔵は指揮官の額に口づけ、それから信濃の額にも口づけた。

「さて、これからはどうする？ 指揮官はまだ若い雄だ。一度の射精で満足できるはずがない。信濃のまんこはまだ窄まっているし、妾のまんこも先ほどいったばかりで、まだまだ汝を啜え込める。どちらを先に玩具にするか、選ばせてやろうか？」

指揮官はしばらく考え、それから——二人の雌を交互に見つめた。その目には、つい先ほどまで残っていた躊躇は、もはや微塵もない。あるのは、ハーレムの主としての静かな決断だけだった。

彼はまず信濃から身体を離し、まだ硬さを保ったままのちんぽを露わにさせる。それから武蔵の腕を取り、彼女を褥に引き寄せた。どうやら今夜の二戦目は、武蔵が相手らしい。

「あら、妾が選ばれたかしら？ ふふ、嬉しいわ。信濃、悪く思わないでほしい。指揮官はな、結局は妾のまんこが一番気に入っているのよ」

信濃は、まだ精液が太腿を伝うままに、ゆっくりと首を振った。

「……いいえ、姉様。妾もそれを、夢で見っていました。指揮官はこれからたくさんの雌を抱えるけれど、その中心にはいつも姉様がおられる。それは変わらぬこと。妾は、その次で構いませぬ」

「本当に賢い娘だわ。安心しなさい、今夜はまだまだ長い。そなたの胎にも、もう一度たっぷり注いでもらおう。何せ、初めての獲物なのだからな——子種は多い方がよい」

武蔵は褥に仰向けになり、自ら両脚を大きく広げて指揮官を招き入れた。彼女のまんこはすでに蜜でぬかるみ、先ほどの絶頂の余韻でひくひくと窄まっている。

「さあ、指揮官。今夜という夜を、とことん愉しもう。妾と信濃、二匹の雌を相手に、夜明けまでに何度種を注げるかしら？ 群れの主の実力、見せてもらうわよ♥」

指揮官は無言で、武蔵のまんこにちんぽを押し当てた。ぬちゅ……と蜜の音がして、彼の亀頭が武蔵の膣に吸い込まれていく。

武蔵はその感触を味わいながら、心の奥で静かに笑った。

(信濃の寝所に忍び込んだ時点で、勝ちが決まっていた。信濃は夢で見ている。逃げないと決めていた。そして指揮官は、妾が三年かけて植えつけた言葉によって倫理の籬を外し、ついに自らの意志で雌を仕留めた)

(今夜という長い夜が、指揮官の——いや、妾たち全員の新しい始まりだ。これから指揮官は、次々に新しい雌を玩具にしていく。この母港のすべての雌を孕ませるまで、妾の計画は終わらない)

ずちゅっ、ずちゅっ、ずちゅっ……！

指揮官の腰が、再び激しく動き始めた。武蔵はその動きを受け止めながら、指揮官の背中に両脚を絡める。背後では信濃が、まだ震える身体を起こし、二人の交尾を眠たげながらも熱い目で見つめている。

月はまだ高く、夜明けまでは長い。

(さあ、今夜はこれからが本番だわ)

武蔵の口元に、雷霆の戦艦らしい妖しい笑みが広がった。

五 長い夜の果てに

母港に朝を告げる汽笛が、水平線の彼方から微かに響いてきた頃——。

信濃の寝所には、三人の身体が折り重なるようにして褥の上に沈み込んでいた。部屋の中には精液と愛液と汗の匂いが濃密に混ざり合い、幾重にも垂らされた淡い帳が、その淫らな空気を閉じ込めている。

信濃は指揮官の左腕を枕に、深い眠りに落ちていた。その白い裸体には、指揮官の手の跡がいくつも残り、太腿の内側には何度も注がれた精液が幾筋も乾いて白く跡を作っている。それでも彼女の寝顔は不思議と安らかで、時折むずかるように身じろぎしては、指揮官の腕を確かめるようにぎゅっと抱きしめていた。

武蔵は指揮官の右腕の中で、うつらうつらとまどろみながらも完全には眠っていなかった。彼女はこの夜、指揮官が信濃の胎に注いだ回数を数えていた。正確には三回。武蔵の胎には二回。合計五回の射精——それを一晩で成し遂げた指揮官の体力と性欲は、もはや群れの主にふさわしい水準に達している。

(上々だわ。それに……)

武蔵は薄目を開けて、指揮官の寝顔を盗み見た。彼は深く眠っている。初めて自分の手で雌を仕留めた夜の、緊張と達成感と疲労が、心地よい重さになって彼の瞼を閉じさせているのだろう。

武蔵はそっと身体を起こし、指揮官の額に口づけた。

「——よくやったわ、妾の愛しい群れの主。今夜、汝は生まれ変わった。これからはもう、迷うことはない。どの雌を玩具にしようかと、愉しみながら選べばよいのだ」

眠る指揮官は答えない。されど武蔵は、彼が夢の中で新しい獲物を追いかけているような気がして、ふふ、と笑った。

それから武蔵は、信濃の方に目を向けた。信濃もまた眠っているが、その寝顔は出会った頃よりもずっと大人びて見える。雌として、雄の玩具として、すでに覚悟を決めた者の顔だ。

(信濃。そなたは今夜、妾の計画の要になってくれた。指揮官が初めて自分の手で仕留めた雌。その事実はこれから先、決して揺るがない。そなたはこれからずっと、指揮官のお気に入りへの精液コキ捨て用お嫁さんだ。どれだけハーレムが拡大しても、最初の獲物としての座はそなたのもの。妾はそれを保証するわ)

武蔵は信濃の髪を一房すくい、そっと唇を寄せた。

(されどな、信濃。これは終わりではない。まだ始まりだ。指揮官はこれから、もっと多くの雌を玩具にする。妾が母港の全艦船を、一人残らず指揮官のハーレムに加えるまで、この計画は続く。そなたにはその「長女」として、新しく加わる娘たちの面倒を見てもらうこともあるだろう。頼んだわよ)

武蔵はそれから褥を抜け出し、わずかに障子を開けて外の様子を窺った。東の空が白み始め、夜明けが近いことを告げている。海は凪いでいて、今日も重桜の母港には穏やかな一日が訪れようとしていた。

武蔵は障子を閉め、再び褥へと戻った。指揮官と信濃のあいだに身体を滑り込ませ、二人の温もりに包まれながら目を閉じる。

(長い夜だった。されど、これからもっと長い夜が続く。指揮官のハーレムが拡大するたびに、こうして夜通しの交尾が繰り返される。妾はそのすべてを見届け、時に導き、そしていつでも汝の一番の雌であり続ける)

武蔵の胎内では、先ほど注がれたばかりの指揮官の精液が、まだどくどくと熱を帯びて子宮を満たしている。その感覚を愛でながら、武蔵は静かに瞑目した。

(指揮官ヤリチンイケ雄化計画は、新たな段階に入った。次は誰をあてがおうかしら——赤城？ それとも大鳳？ いや、まずはもう少し手近なところから——)

そんな邪な算段を胸の裡で転がしながら、武蔵は静かに朝を迎えようとしていた。

その口元には、雷霆を従える大戦艦らしい、妖しくも慈愛深い微笑みが浮かんでいる。

——指揮官が初めて自分の手で雌を仕留めた夜。

それは、信濃が自ら逃げないことを選んだ夜であり、

武蔵の計画が大きく前進した夜であり、

指揮官の倫理観が性欲の前に静かに膝を折った夜だった。

そして何より——

これから始まる長い長いハーレムの、

その最初の一ページが刻まれた夜だった。

月は沈み、朝陽が昇る。

今日という新しい一日が、

群れの主とその雌たちの物語を静かに書き記していく——。

(了)